

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32608

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02494

研究課題名（和文）幼保小移行期の親の適応を支える親支援プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a parent support program to support parental adjustment during the transition from preschool to elementary school.

研究代表者

西坂 小百合（Nishizaka, Sayuri）

国立女子大学・家政学部・教授

研究者番号：50442116

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の主な成果は以下の3点である。小学校入学前に親が抱く不安は、「子どもの様子がわからなくなる」ことであるが、その不安は第1子の親で顕著に高い。時間の使い方に対する期待は保育所よりも幼稚園の親のほうが高く、自分自身の就労生活等を維持しながらの移行期であるために、学校の状況が捉えにくい可能性がある。就学後の子どもの様子や親の関わり方について多くの情報を提供する、他の親と共有する機会を提供するなどが、親の不安を減らし、親自身の変容を促す可能性がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

小学校入学を迎える子どもの適応的な移行は重要な検討課題であり、その適応的な移行にとって重要な背景要因である親の役割について焦点を当て、親自身が適応的に小学生の親に移行すること、そのための親の意識変容について検討を進めた。本研究においては、親自身が抱く不安に「子どもの様子がわからなくなること」があり、入学前また入学後においても、子どもの育ちや学校生活の見通し、親の過ごし方についての情報提供や親同士の情報共有が有効である可能性を見出したという点で社会的意義があるといえる。

研究成果の概要（英文）：The three main findings of this study are as follows; 1) Worries about child's school life are held by parents before entering elementary school, and these worries are significantly higher among first-born parents. 2) Expectation towards a new lifestyle is higher among parents of kindergarten students than among parents of nursery school students. They may be less likely to know what is going on at school because they maintain their own working lives, etc. 3) Providing parents with more information and opportunities to share with other parents about their children's school life and parental involvement after entering elementary school may reduce parental anxiety and promote their own transformation.

研究分野：幼児教育 発達心理学

キーワード：幼保小移行期 親の適応 親の発達 コンピテンス 親の意識変化

1. 研究開始当初の背景

幼稚園・保育所等から小学校への移行期における児童の適応は、幼小接続や幼小連携などの言葉で代表される重要な検討課題である。これは日本に限らず多くの国々で検討されており、OECD (2017) が Transition についてまとめた報告書においても、様々な国の実態や取り組みが紹介され、児童の適応を支えるプログラム開発や、幼児教育・小学校教育におけるカリキュラムへの働きかけなどがまとめられている。我が国においても、これまでは、児童や幼保小のカリキュラムに働きかけることが中心であった(例えば、アプローチ・カリキュラム、スタート・カリキュラムなど(文部科学省, 2015))。しかしながら、移行期の児童の適応を左右する背景要因の一つである、親のコンピテンスや親の意識変化などといった「親」についての研究は、我が国においては十分な知見が得られているとはいえない。OECD (2017) の報告においても、小学校への移行における親の役割の重要性が示され、円滑な移行にとって親子関係の質が影響を及ぼすこと、親自身が子どもの困難などの特徴を理解するのに移行期が重要な時期であることがまとめられている。そのうえで、保護者が子どもの移行を支えるためのツール(情報提供、認識を高める活動など)が開発されている国もあるが、これらもやはり子どもの移行が中心であり、親自身の移行期における適応の課題については未だ検討が十分ではない状況であった。

2. 研究の目的

(1) 移行期の子どもをもつ親の意識変容に及ぼす影響要因の検討

我が国においては移行期の子どもをもつ親の期待や不安などの意識について、探索的な研究がいくつかあるが(例えば椋田, 2013; 富山, 2014; 2015 など) これらの研究で扱われている期待や不安は友達関係や学校生活など「子ども」を取り巻く内容であり、母親と教師との関係や、他の親との関係など、親自身の抱く期待や不安については十分な言及はされていない。移行期の親の意識変化を捉える際に、Wildgruber, A., Griebel, W., Niesel, R. & Nagel, B. (2011) は「個人のレベル」「関係性のレベル」「環境のレベル」の3つのレベルの理論モデルによって期待や不安などの意識を構造的に捉える必要性を指摘している。「個人のレベル」は、親自身が小学生の親としての自分をどのように感じているか、子どもの様子に関して親が得られる情報の程度なども含まれる。また「関係性のレベル」とは、教師や学校との関係、子どもと親との関係、「環境のレベル」には、親自身の学校生活への関与が含まれる。そこで、これら3つのレベルに基づいた移行期の子どもを持つ親の期待や不安などの意識変化の内容を、面接調査及び質問紙調査から明らかにする。そのうえで、これらの意識変化と親としての一般的コンピテンスやその他の要因との関連を検討することで、どのような親の特性が移行期の親の意識変化に肯定的あるいは否定的に影響を与えるのかについて探る。

(2) 親支援プログラムの開発・普及

これらの蓄積されたデータの知見から、幼保小移行期の親の適応が肯定的かつ円滑にすすむような具体的な親支援方法についての手がかりを得た上で、親支援プログラムを開発し、その普及に努めることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 移行期の子どもをもつ親の意識についての尺度開発

移行期の子どもをもつ親の意識についての尺度を作成するにあたり、予備調査として小学1年生の子どもをもつ母親を対象として面接調査を実施する。就学前後での期待や不安について半構造化面接を行い、Wildgruber ら(2011)の3つのレベルに従って回答を整理したうえで尺度を作成し、小学校就学前の子どもをもつ母親を対象に質問紙調査を行い、尺度について検討する。

(2) 就学前後の親の意識の変容とその影響要因の検討

小学校入学前の2月、及び小学校入学後の6月ごろの時期に、上記の意識の尺度、及び親コンピテンスの尺度、その他の属性についての質問項目を含めた質問紙調査を実施する。対象は幼稚園及び保育所の年長クラスに子どもを通わせている母親で、いずれも園を通じて協力を依頼した。また、2月の調査に回答した対象者の中から6月の調査への協力者を募り、調査を実施した。

(3) 小学校入学後の期待や不安の変容の検討

入学前に抱いていた期待や不安がその後どのように変化するのかを検討するため、上記調査対象者が1・2・3年生になった時点での意識の変容を尋ねる質問紙調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 幼保小移行期の親の意識

面接調査をもとに尺度を構成し、質問紙調査によって得られた回答を因子分析することで、3因子を確認した。それらは、子どものいない時間の過ごし方や新しいことへの挑戦など時間の使い方や生活の変化に対する期待を表す「**自分自身の生活の変化への期待**」、先生に気軽に相談できない、あるいは子どもの様子を知ることが難しくなることに対する不安である「**子どもの様子**

「**がわからなくなる不安**」他の親との付き合いや子どもの学校生活への支援に対する自信を表す「**小学生の親になる自信**」であった。

(2) 入学前の親の期待や不安などの意識に影響を及ぼす要因と入学前後での変容

「**子どもの様子がわからなくなる不安**」は、出生順位が第1子である母親においてその不安が高いことが示された。子どもが第1子である場合には第2子以降に比べて就学後の様子が想像しにくかったり、情報が得にくかったりすることによって生起するものと考えられる。したがって、就学後の子どもの生活や親のかかわり方についてより多くの情報を提供する、あるいはすでに小学生の子どもを持つ母親との情報共有の場を提供するなどによって、軽減されていく可能性がある。

「**小学生の親になる自信**」は幼稚園の母親のほうが保育所の母親よりも得点が高く、またコンピテンスである親となることによる成長・発達の高さとも関連することが示された。親となることによる成長・発達は比較的安定した特性であるため、急激に高めたりすることは難しいと考えられるが、それが低い母親を対象として支援を検討する必要があるかもしれない。

「**自分自身の生活の変化への期待**」は幼稚園の母親でかつ第2子以降のグループにおいて得点の高さが顕著であった。子どもが小学生になると保育所の母親よりも自由な時間への期待は高く、その子が末子であるとさらに期待は高まると予想される。幼稚園の母親は子どもの小学校入学に伴う自分自身の生活の変化を予想しているし、ある程度の構えをもって迎える可能性があるが、保育所の母親は小学校入学に際して生活の変化を避け、就労を維持することを求めている可能性がある。それぞれの違いを理解し、就学前・就学後の適切な援助を見出すことが必要である。

小学校入学前後(2月と6月ごろ)での意識の変容について検討したところ、「**子どもの様子がわからなくなる不安**」は入学後に軽減されること、「**自分自身の生活の変化への期待**」は変化しないこと、「**小学生の親になる自信**」は親コンピテンスの高いグループにおいて入学後に低下することが示された。

(3) 幼保小移行期に抱いていた期待や不安の入学後の変化

入学前後の調査協力者を対象に、それぞれ1・2・3年生の12月ごろ、入学前に抱いていた不安や期待の変容や、現在の新たな不安や期待について尋ねる質問紙調査を実施した。その結果、入学後には入学前の不安が漠然としたものであったことに気づき、子どもの成長に伴って別の不安や悩みに移行していた。子どもとの関わりにおいては「見守る」関わりへ移行すること、教師との密ではない関係に慣れること、自分の時間の使い方を工夫するなど、母親自身が変容する姿が示された。これは母親自身が小学生の子どもをもつ親として適応的に変化していく姿であるとも考えられる。そしてその背景には子どもの成長を好意的に捉え、喜びと感ずる姿があると考えられる。

(4) 幼保小移行期の親の意識に対するコロナ禍の影響

本研究は2018年度から開始されたが、2020年以降のコロナ禍によって、幼稚園・保育所から小学校への移行はその様相が大きく変化することとなった。小学校の様子が一層わかりにくくなるという状況が、移行期の子どもをもつ親の不安の高まりを予想させることから、本研究は、コロナ禍の影響について検討する必要があると判断し、コロナ前のデータとの比較をもとに、コロナ禍の影響について検討することとした。その結果、「**自分自身の生活の変化への期待**」は、コロナ前のほうが期待が高く、コロナ禍においては期待が持ちにくいことが示された。「**小学生の親になる自信**」はコロナ禍前後での違いは見られず、影響を受けにくいことが確認された。「**子どもの様子がわからなくなる不安**」については、入学前の不安はコロナ禍のほうが高いが、入学後にはその違いは示されなかった。しかしながら、コロナ禍において入学前後での不安はその内容が変化した部分もある可能性があることと示唆される。

(5) まとめと今後の課題

本研究においては、入学前後の親の期待や不安の様相を理解し、その影響要因を検討することにより、移行期の子どもをもつ親に対する効果的な支援プログラムの開発を試みることを目的としていた。期待や不安の様相やその影響要因についてはある程度明らかにすることができ、親への情報提供や情報共有の場の提供が効果的である可能性は示されたものの、それらをプログラム化して実践することはコロナ禍の幼稚園・保育所・小学校等においては困難であった。保護者支援という視点から考えると、岡崎・安藤(2018)も、就学前後の子育てにおいて保護者が必要とする支援として他の保護者との交流が求められていることを示しているように、就学後の子どもの様子や親の関わり方について多くの情報を提供する、他の親と共有する機会を提供するなどが、親の不安を減らし、親自身の変容を促す可能性があると考えられることから、こうした情報を幼稚園・保育所・小学校等へ周知していくことが必要である。

引用文献

梶田善之 2013 幼稚園から小学校の移行期における保護者の子どもへの期待と不安の変容過程 - 入学前と入学後の保護者へのインタビューを通して - 東京大学大学院教育学研究科紀要, 53, 233-245

文部科学省 2015 国立教育政策研究所教育課程研究センター. スタートカリキュラムスタートブック https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/startcurriculum_mini.pdf, (参照 2020-

10-1)

OECD. 2017 Starting Strong V: Transitions from Early Childhood Education and Care to Primary Education. OECD Publishing, Paris.

岡崎由美子・安藤美華代 2018 就学前後の子をもつ親の子育て不安・子育て支援に関する検討
岡山大学教師教育開発センター紀要, 8, 193-206.

富山尚子 2014 小学校への適応に向けて - 小学校1年生の保護者の意識 - 東京成徳大学子ども学部紀要, 3. 9-17

富山尚子 2015 小学校と保護者の連携 - 入学直後の保護者の意識 - 東京成徳大学子ども学部紀要, 4. 1-8

Wildgruber, A., Griebel, W., Niesel, R. & Nagel, B. 2011 Parents in their transition towards school. An empirical study in Germany. Paper presented to the 21st EECERA annual Conference in Geneva, Switzerland.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 西坂小百合・村上康子・綾野鈴子・権藤桂子	4. 巻 70
2. 論文標題 小学校への移行期の子どもを持つ母親の 適応に関する研究 : 小学校入学前後の比較及び入学後の変容過程の探索的検討	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 共立女子大学家政学部紀要	6. 最初と最後の頁 125-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西坂小百合・綾野鈴子・村上康子・権藤桂子	4. 巻 67
2. 論文標題 小学校への移行期の子どもを持つ母親の適応に関する研究 - 幼稚園・保育所による比較 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 共立女子大学家政学部紀要	6. 最初と最後の頁 59-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 綾野鈴子・西坂小百合・村上康子・権藤桂子	4. 巻 65
2. 論文標題 幼稚園から小学校への移行期の母親の適応要因	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 共立女子大学家政学部紀要	6. 最初と最後の頁 93-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Nishizaka, Sayuri., Ayano, Suzuko., & Murakami, Yasuko.
2. 発表標題 Adaptation of Parents with Children Transitioning to Elementary School: Impact due to COVID-19
3. 学会等名 31st EECERA Conference, Portugal (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Nishizaka, S., Ayano, S., Gondo, K., & Murakami, Y.
2. 発表標題 The Adaptation of Parents after Sending Their Children to Elementary School in Japan.
3. 学会等名 The 30h EECERA Online Festival. (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西坂 小百合・綾野 鈴子・村上 康子・権藤 桂子
2. 発表標題 幼保小接続期における保護者の期待と不安に対するコロナ禍の影響
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 綾野鈴子・西坂小百合・村上康子・権藤桂子
2. 発表標題 幼稚園・保育所から小学校への移行期の母親の適応要因
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nishizaka, S., Ayano, S., Gondo, K., & Murakami, Y.
2. 発表標題 The Adaptation of Parents during Their Children's School Transition from Nursery School to Elementary School in Japan.
3. 学会等名 The 29th EECERA Conference, Thessaloniki, Greece. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nishizaka, S., Gondo, K., Murakami, Y., & Ayano, S.
2. 発表標題 The adaptation of parents during their children's school transition from kindergarten to elementary school: Comparison study before and after entering elementary school
3. 学会等名 The 28th EECERA Conference, Budapest, Hungary (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村上 康子 (Murakami Yasuko) (20458863)	共立女子大学・家政学部・教授 (32608)	
研究分担者	綾野 鈴子 (Ayano Suzuko) (50732640)	駒沢女子短期大学・その他部局等・准教授 (42621)	
研究分担者	権藤 桂子 (Gondo Keiko) (90299967)	共立女子大学・家政学部・教授 (32608)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------